茂原市史編さん事業の活動

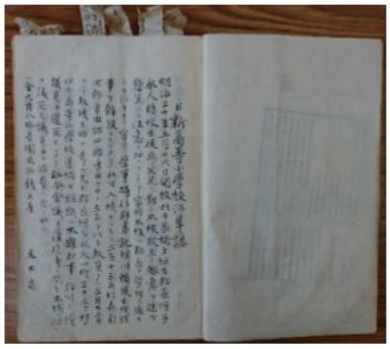
（近現代史調査　その二）

近現代部門では、二〇二三（令和五）年以降、茂原市内の各小学校所蔵の「沿革誌」の調査を進めてきました。「沿革誌」とは、学校の創立以来の歴史や教員の異動、児童生徒たちの動向、主な出来事などを継続的に記録したものです。

千葉県では一八七六（明治九）年の「学校沿革誌并ニ日記調整概則」により、学校の沿革や事績を半年ごとに「沿革誌」として編纂し県庁に提出することと、その材料とするため毎日の教員・生徒の様子などを「日記」に書き記すことが定められました。その後、記載項目は変容しつつも、各学校において現在にいたるまで書き継がれ保存されてきました。

明治期は行政・財政の事情もあって、学校の新設や統合、学区の変更が頻繁にありました。現存している古い「沿革誌」の多くは、そうした節目などに従前の記録を整理しまとめられたとみられます。

一八八七（明治二〇）年創立の日新高等小学校（のち茂原小に統合）の「沿革誌」には、『教育報知』という当時よく読まれた教育雑誌の、一八九六（明治二九）年の「小学校沿革史編纂に就きて。」という記事が挟み込まれていました。この記事は「学校沿革史編纂上の注意」が記されており、沿革誌に書くべきこととして「学校の名称及創立せる年月日」「諸儀式執行の形勢」「卒業生徒に関する事項」「学齢児童の就学不就学の形勢」「修学旅行及運動会に関する記事」など二二項目を挙げています。そのうち「学校長の教育上に有する意見」について、実際には多くの学校で書かれておらず「実に遺憾」としています。



▶日新高等小学校沿革誌（茂原小学校所蔵）。前のページには雑誌記事が折りたたんで挟み込まれ、修正すべき箇所には付箋が貼られている。

同校の「沿革誌」は、一八九七（明治三〇）年度までの分がまとめて書かれたようですが、この雑誌記事の影響でしょうか、ところどころ、当時の校長の意見が書き込まれています。学校行事を実施した際にその目的や成果についての考えを書いているほか、経費不足や行政の不備に対する不満もありました。一八九八（明治三一）年一月に女子部校舎が焼失した際には、「是如何ナル凶日ゾヤ」と嘆き、学びの場を失った女子生徒たちが本校校舎に移ったことで教室が狭くなり、「教授上管理上トモニ具不便云フヘカラサルニ至レリ」と書いています。

当時、「沿革誌」は役所に提出しチェックを受けたようで、修正の付箋がつけられています。ほとんどは誤字や用語の指摘ですが、先の記述については感情的な文面が「沿革誌ノ文面トシテハ如何カ」と指摘され、削除が適当との付箋がついています。ただし現存している「沿革誌」は、付箋が貼られたまま書き直されることなく、一九〇八（明治四一）年三月の閉校まで書き継がれました。

近現代部門では現在、茂原の教育のあゆみを示す貴重な史料である「沿革誌」をより活用するため、調査報告書を編集中です。明治期の「沿革誌」は読みやすく翻刻し、近年にいたるまでの「沿革誌」についても、九名の調査執筆委員がそれぞれの研究分野や知識にもとづいて分析しています。年度内の報告書刊行を目指し、勉強会を開き意見交換を重ねながら、協力して取り組んでいます。

※「沿革史」と書かれる場合もありますが、ここでは「沿革誌」と総称します。

茂原市史編さん委員会
調査執筆委員
多和田　真理子

問合せ
美術館・郷土資料館
☎(26)2131 FAX(26)2132

文芸コーナー

夕暮れの空

勝又　政芳

太陽が西の里山に隠れ
夕焼けが真赤に染まるころ
地球の裏側で
日の出に手を合わせる人も
いるだろう
やがて西の空に
一番星の金星が輝き
辺りは暗さが増してくる
南の里山の上にポカリと
黄色の光が浮かび
ゆっくりと向ってくる
何の光だろう・・・？
飛行機のヘッドライトだ！
頭上に近づき
赤青の灯火を異なる周期で
瞬き点滅して飛んでくる
高度が高く機体は小さく映り
軽い騒音を振り撒きながら
北の里山を超えて行った
頭上は次の灯火が瞬き点滅し
南端にヘッドライトが続き
三分程の間隔で通過して行く
羽田空港へラッシュアワーだ
日本へ東京へ
どこから来たのだろうか
多くの人の夢と希望を乗せて

●偶数月は「短歌・俳句・川柳」を、奇数月は「詩」を掲載しています。
●投稿は楷書でお願いします。作品・氏名（ふりがな）・電話番号を明記してください。
※提出先　〒297-8511　茂原市道表1番地　茂原市役所シティプロモーション課
詩は随時募集しており、どなたでも応募可能です。たくさんのご応募お待ちしています。
「広報もばらの詩」と朱書きしてください。原稿は30行以内でお願いします。